



こころのチキンスープ ● ライオンズ編 智也は走る自分のために

構成／青山研

打ち倒す者は強いが、起き上がる者はもっと強い
——十三世紀写本——

時々、ふっと思っんですよ。私らに、**伊藤智也**を応援しようと思わせたのは、あれは何だったんだろうか、とね。

いや、あなた、ちょっと見た目にはね、分かりませんよ。座ってニコニコ笑っている**智也**を見ただけじゃ。若いしね。まだ三十九歳。若いけど社長。そう、働き盛りですよ。

でもね、あなた、自分の体が、徐々に言うことをきかなくなつて、ある日突然、両脚が動かない、やがて左目が見えなくなる、何日かしたら、左腕が動かなくなつた。そんなことになったら、あなた、どうします。

智也は、あんなに元気そうに見えますけどね、で、後ろの二輪のところに座つてごんですよ。左半身麻痺だから右手だけで車輪を回して。あいつ、それでいて笑顔だ。



そのうちにね、**智也**は、毎年、大分市でやっている国際車いすマラソン大会に出るって言い出した。私ら、何だかね、あいつのひたむきさの中に、私らが忘れてたものがあるんじゃないかって、思いだした。「くそっ、負けんぞ」必死に病氣と戦っている**智也**の声が聞こえるような気がしたんです。立ちほだかっている、とてつもないものと、あいつは人間の何かを賭けて戦ってるんじゃないか。しかも笑顔で戦ってるんです。

クラブはね、全員一丸となつて応援しようと決めました。競技用車いすも贈りました。大会の時もね、**智也**の会社の社員と一緒に大分に行きましたよ。

車いすマラソンは制限時間三時間。その間に四十二^キ余を走れば良いんです。大分^{クラ}のメンバー

そういう病氣なんです。信じられませんでしたよ、初めは私らだって。多発性神経硬化症という病氣なんだそうです。三年前のあいつの誕生日のすぐ後でしたよ。

同じ鈴鹿^{クラ}のメンバーですからね、誕生祝いやろうかって言つてたんですよね。だから、病氣になつたって聞いた時も、まさかつてね、信じられない。じわじわと全身が麻痺し、病魔がなぶるように体を冒していく病氣。神も仏もないのか、むごすぎますよ。

でもね、それは、まだ入り口の話でね。またまた信じられないことが起こつたんです。あれは、それから一年くらいたつた時でしたか。**智也**が、車いすマラソンの練習を始めたんですよ。脚も左手も動かないんですよ、左の目も見えない。そんな体で、車いすに乗つて、マラソンやろうつて言うんですよ。

止めるのが当たり前でしょう、何が起こるか分からない。自由の利く右手だって、いつ突然動かなくなるか、分からないじゃありませんか。医者だって、反対だったんだから。でもね、**智也**は、やりだしたら何でも動かない。見たことありますか、障害者マラソン用の車いす。大型の三輪車も応援してくれて、三十^キ地点で出迎えてくれることになつた。

ところがその三十^キ地点で事故が起きたんです。後ろから来た選手が、**智也**の左側を抜こうとした。**智也**は左目が見えない。避けたが間に合わず、車いすごと横転した。右肩脱臼です。棄権させるか。幾ら何でも無理です。

だけど、**智也**は違った。競技員に右肩をはめさせた。その右腕で車を回す。前に進むのがやつとですよ。脂汗がにじんでるが、助けようがない。どんどん抜かれる。それでもやめない。やめると言わせない、迫力が、**智也**の体を包んでた。何に向かつて、あいつは走っていたんでしょうね。棄権しろつて、何度言おうとしたか。

沿道でね、クラブの仲間が、頑張れ、頑張れつて、声援送つてね。こんな世の中だから皆つらいもの抱えてる。でも、**智也**が頑張つてるの見て、よし、おれもつて気になるんですよ、きつと。あのメンバーなんか涙浮かべてね、頑張れつて叫んでた。気持ちでは、皆いつの間にか、**智也**と一緒に走つてね、自分のために、一緒に走つてたんですよ。二時間四十五分、百五十八位でした。立派でしょ。完走だもの、あなた。